

大学公開講座における科目間の学びを支援する デジタルバッジの導入と評価

Introduction and Evaluation of a Digital Badge to Support Learning between Courses in University Open Lectures

天野 慧^{*1,*2,*3}, 都竹 茂樹^{*1,*2,*3}, 鈴木 克明^{*2,*3}, 平岡 齊士^{*2,*3}
Kei AMANO^{*1}, Shigeki TSUZUKU^{*2}, Katsuaki SUZUKI, Naoshi HIRAOKA

^{*1}熊本大学政策創造研究教育センター

^{*1}Center for Policy Studies, Kumamoto University

^{*2}熊本大学大学院教授システム学専攻

^{*2}Graduate School of Instructional System, Kumamoto University

^{*3}熊本大学教授システム学研究センター

^{*3}Reserch Center for Instructional Systems, Kumamoto University

Email: keiamano@kumamoto-u.ac.jp

あらまし：本研究では、大学公開講座において基礎科目修了後に、次の応用科目への事前準備を支援する道具としてデジタルバッジを導入し、その効果を検証することとした。応用科目の事後アンケートで、基礎科目で獲得したデジタルバッジの有用性について評価を求めたところ、応用講座の事前準備に役立ったという肯定的な評価が得られた。さらに、回答の理由について自由記述を求めた結果では、デジタルバッジに紐付けられた成果物が学びの振り返りに役立ったことや講師からのフィードバックが応用科目の事前課題へ取り組むのに役立ったとのコメントがあり、デジタルバッジの有用性が示唆された。

キーワード：デジタルバッジ、大学公開講座、リフレクション、動機づけ

1. はじめに

社会人を対象として教育実践においては、学習に費やした時間や履修したという事実ではなく、学習目標の習得度で学習者の成長を評価し、学習成果の活用を支援することが重要である。しかしながら、現状では、要求される学習時間は規定されながらも、その時間内で何をやったのか、そしてその結果として何ができるようになったのか、何を習得したのかについては問われておらず⁽¹⁾、学習成果を教育プログラム修了後に受講者が活用しやすい環境が構築できていない実態がある。

筆者らは、こうした課題を解決するために、教育プログラム修了の証として、学習成果物や合格基準、成果物に対する講師からのフィードバックや他の受講者からのコメントといった情報が付与されたデジタルバッジを開発した⁽²⁾。このデジタルバッジは、受講者自身が既に修了したプログラムの成果を振り返り、プログラム修了後に新たな学びや職務の指針としてもらうことを狙っていた。一方で、このような情報と紐付けられたデジタルバッジが、受講者のプログラム修了後の学びに対し、どのような有用性があるのかを検証することが課題として残っていた。

プログラム修了後の学びの一つに、後続する応用科目を受講することが考えられる。そこで、本研究では、熊本大学公開講座インストラクショナルデザイン（以下、ID）を対象として、基礎科目修了後に、次の応用科目への事前準備にどのように役立てられたのか、その効果を検証することとした。

2. 方法

2.1 熊本大学 ID 公開講座カリキュラム

熊本大学 ID 公開講座⁽³⁾は、教育に従事する多様な社会人が、基礎的な ID スキルを習得し、自身の教育事例に役立てることを目的としている。カリキュラムは入門編と応用編の2つの科目から構成される。入門編では、IDの基礎的な用語を習得し、講師が提示する事例の改善策に対する改善策を検討する。応用編では、入門編で習得した知識をベースとして、受講者が従事する教育事例の改善アイデアを提示することを目標としている。いずれの科目も、事前事後のeラーニングと受講者同士のワークや講師との質疑を中心とした対面ワークショップから構成されている。また、全ての課題の合格基準を満たした受講者には、それぞれの科目でデジタルバッジが発行された。

2.2 収集したデータ

対象としたのは、2016年度に実施したID公開講座であった。入門編で受講者が獲得したデジタルバッジが応用科目の事前準備に役立ったのかを検証するために、応用編の対面ワークショップの事後アンケートで、デジタルバッジの有用度について4段階で回答を求めた。さらに、回答には自由記述で回答の理由を記述することを求めた。

アンケートの有効回答者は、昨年度以前に公開講座の入門編を修了し、応用編に参加した者や未回答者等の15名を除く、76名であった。

3. 結果

3.1 デジタルバッジの有用度の評価結果

応用編の事後アンケートで、入門編で取得したデジタルバッジが、応用科目の学習に役立ったか回答を求めた結果を表1に示す。

表1 入門科目で取得したデジタルバッジの有用度評価 (N=76)

| 応用科目の学習にどの程度役立ったか | 回答者数 ※カッコ内占有率 |
|-------------------|------------------|
| とてもそう思う | 18 (24) |
| そう思う | 47 (62) |
| 思わない | 9 (12) |
| 全く思わない | 2 (2) |

3.2 回答の理由 (肯定派)

肯定的な回答 (とてもそう思う, そう思う) をした受講者の記述を分類した。表2に代表的なコメントを記す。

表2 肯定派の代表的なコメント

※分類のカッコ内は、コメント件数

| 分類 | 代表的なコメント |
|-------------------|--|
| 振り返り(21) | 入門編を再度振り返り、応用編の事前課題をやるうえでの参考にできた / 入門編から時間が経過していたため、バッジからのリンクは記憶を戻すのに役立った |
| 講師からのフィードバック (17) | フィードバックがあり、自分自身の学びに気づいてモチベーションが維持できた / 別のモデルが必要だったとわかった。だから応用編で伝える内容がよりクリアになった |
| 意欲の喚起(5) | 役立つというより自信になった。応用編もできるようなワクワクした気持ちになった / 自分がどの程度理解しているか分かることと、モチベーションにつながる |
| 他の受講者からの学び(3) | 他の方の意見や取り組みを見ながら学べる場所が多かったから / 他の方の意見を取り入れることができた |

3.3 回答の理由 (否定派)

否定的な回答 (思わない, 全く思わない) をした受講者の記述を分類した。表3に代表的なコメントを記す。

表3 否定派の代表的なコメント

※分類のカッコ内は、コメント件数

| 分類 | 代表的なコメント |
|---------------------|--|
| デジタルバッジに対する理解不足 (5) | デジタルバッジの内容を理解していなかった / あまり使い方を理解していなかった |
| 必要性のなさ (5) | 入門編での成果物を見なくても、応用編の課題に取り組めた / それが目的ではないので、なくても構わない |

4. 考察とまとめ

本研究では、2つの科目から構成されるID公開講座カリキュラムにデジタルバッジを導入し、入門編修了後に、後続の応用の事前準備へどのように役立てられたのか効果した。応用編の事後アンケートを分析した結果、デジタルバッジの有用度について80%以上の受講者が「とてもそう思う」「そう思う」と回答した。そのため、科目間の学びを支援する道具としてデジタルバッジは受講者に概ね肯定的に受け止められたと考えられる。

さらに、回答の理由について肯定派の意見を分類したところ、「入門編から時間が経過していたため、バッジからのリンクは記憶を戻すのに役立った」のように、学習成果が付与されたデジタルバッジによって入門編での学びの振り返りに役立てられたことや、「フィードバックがあり、自分自身の学びに気づいてモチベーションが維持できた」のように、バッジに付与された講師からのフィードバックが受講者のプログラム修了後の学びの指針となったことが確認できた。また、学習意欲の喚起に言及したコメントでは、「役立つというより自信になった。応用編もできるようなワクワクした気持ちになった」のように、成果物とリンクされたデジタルバッジが、単なる外発的な動機づけを刺激する道具ではなく、受講者の自信ややりがいを換気することも示唆された。以上のことから、学習成果物や合格基準、成果物に対する講師からのフィードバック付与されたデジタルバッジが、プログラムでの学びの振り返りを促し、プログラム修了後の学びの指針となる可能性が示唆された。

一方で、デジタルバッジの教育実践への導入についての課題点も明らかとなった。デジタルバッジの活用方法に対する理解不足については、活用方法の説明と受講者がデジタルバッジを実際に活用するタイミングに時間差があったため、活用方法の理解度にバラつきが出たのではないかとと思われる。デジタルバッジ取得時に、活用方法を説明する等の方策を検討したい。また、デジタルバッジの必要性を感じてもらえなかったという課題については、そのメリットを受講者へ伝えるために、これまでの受講者のデジタルバッジに対するコメントを紹介し、どのように役立つかを例示する等の改善策を検討したい。

参考文献

- (1) 鈴木克明「職業人教育と教育工学 (第1章)」中山実・鈴木克明 (編著)『職業人教育と教育工学』ミネルヴァ書房, 1-19. (2016)
- (2) Amano, K., Suzuki, K., Tsuzuku, S., & Hiraoka, N.: "Designing a Digital Badge as a Reflection Tool for an Instructional Design Workshop". Proceedings of International Conference on Media in Education 2016, pp.536-541.(2016).
- (3) 熊本大学政策創造研究教育センター「熊本大学インストラクショナルデザイン公開講座」<http://www.cps.kumamoto-u.ac.jp/syogaigakushu/koukai/id/> (2017年5月18日閲覧)